

## お碗

福岡市中央区

小崎 美晴

わが家の仏壇の中には、ロウソクや線香と一緒に小さな木のお碗が入っている。縁はギザギザに欠け、表面は白く粉を吹いたように乾燥しており、下は黒い漆塗りだったなど、感じさせもしないみじめな姿のお碗である。だが、これはわが家の、決して手放すことのできない宝物なのだ。これには、旧満州から1年余をかけて日本へ引揚げてきた、母と、私、妹の3人の生活が凝縮されているからである。

満州で帝国協和会の仕事をしていた父と、父との結婚で新京へやってきた母との間に私は生まれた。昭和17年、日本が敗戦国になるなど大半の人達が思ってもいなかった頃である。しかし19年3月に父は現地召集を受けて出征し、その後に妹が生まれた。

それから1年後、ソ連軍の越境により危なくなるということで、協和会の出征兵士の家族は、全員日本へ引揚げることになる。引揚げにあたっての説明を受け、出発するまでには2時間の猶予しかなかったというから、準備の慌ただしさは大変なものであったろう。昭和20年8月の、終戦になる1週間前のことだった。

荷物は手に持てるだけにする、それに越冬の用意をしてということで、各々の冬支度と父の背広、オーバー、妹のおむつ、1冊のアルバム、これが母が持ち出すことのできた財産だった。引率役として協和会の幹部の方が数名つきそい、給料の管理と食料の世話をし下さった。母はリュックの上に妹を背負い、3才の私の手を引いて、長い引揚げ生活が始まったのである。

新京から無蓋車で出発したが、北朝鮮まで来たところで足止めを食ってしまい、全員が現地の日本人宅に分宿することになる。ここでの生活は1年に及んだ。

この間お世話になったKさん宅からいただいた品の一つに、このお碗があったのだ。離乳食の必要だった妹には欠がせないもので、母は毎日これで食事をさせてきた。お碗は、それからの生活をずっと共にするようになる。協和会から分配される食料だけでは足りず、父の背広とオーバーは、闇市でお米に変わり私たちを助けてくれた。また、母は下駄売りをして、古米を手に入れたりしたこともあった。

そして1年後に、野宿をしながら38度線を越えて、他の団体と一緒に米軍キャンプに収容されたのだ。私には南朝鮮に入る時に渡った川の記憶が、しっかり焼き付いている。大勢の大人と子供が、薄暗い川を渡っている。浅瀬を探して進むのだが、水は大人の膝上まであり、緊張を帯びた大人達の騒めきと、泣き叫び親を呼んでいる子や、親にしがみついて動けなくなっている子がいたり、当時を思い出すたびに、一番に出てくる光景である。

収容所での食事は、毎日がこうりゃん飯かとうもろこしだった。五右衛門風呂のような大きな釜でたかれており、「飯上げ～」という声で傍に行くと、蓋が開けられた瞬間にわっと湯気が立ちのぼる。それを見るのがうれしかった。皆、いつもお腹をすかしていたのだ。

しかしそれは消化が悪かったので、長期に渡る消化不良で内臓を痛めたり、栄養失調になってしまった人が沢山いたのである。そのため、一応の便所の設備はあったが、そこにはいつでも長い行列が出来ていた。また便所とはいっても、穴を掘って板を渡し、周囲にムシロをぶら下げただけの、簡単なものであった。

母は妹が消化不良を起こさないように、食事のたびに、一度こうりゃんやとうもろこしをかみ砕き、それをあのお碗に移してから食べさせてきた。そのお陰で、私と妹は無事に帰り着けたのだと思う。

21年秋、日本へ帰る舟に乗った。しかし途中でコレラが発生してしまったのだ。り患者のみが赤十字の船に収容されることになり、このとき、引き裂かれまいとするあちこちの親子の泣き声と、横付けにされていた真っ白な船、自分も連れて行かれるのでは、という恐怖でいっぱいだった感情が、今も残っている。

そして幸い私たち親子は離されることもなく、やっと佐世保に上陸することができたのである。栄養失調で足が立たなくなっていた妹は、ずっと母におんぶをされたままだった。

それから50年、無から始まった生活の中で、小さなお碗も大きく役割を果たしてくれた。そしてそれを見るたびに、満州からつながって来た生命を思ったものだ。しかしあまりのくたびれように、「長いことご苦労さまでした」と、いまでは、仏壇の中でお休みいただいているのである。いずれは妹に手渡してあげようと思いつつ。